

日本語発音における近年のアクセント傾向の分析と考察

～『NHK 日本語発音アクセント新辞典』の発行に寄せて～

● 田 中 浩 史

1. はじめに

2016年5月に『NHK 日本語発音アクセント辞典』が18年ぶりに改訂され、『NHK 日本語発音アクセント新辞典（以後『新辞典』と略す）』と名称をかえて発行された。筆者はいま大学での研究教育に携わっているが、NHKが『新辞典』の改訂作業をスタートした際にはNHK放送文化研究所に在職していて、『新辞典』改訂の発起人の1人となり、あわせて初期の編集委員（NHK放送文化研究所アクセント辞典編集事務局）も務めていたことから、今回の改訂・発行に当たって、その考え方や完成版の改訂内容についての検討・考察を試みたい。またアクセント辞典の分野では、本辞典と二分する使用者数を抱える三省堂発行の『新明解日本語アクセント辞典（以後『新明解』と略す）』と『新辞典』との相違点についても比較考察したい。



『NHK 日本語発音アクセント新辞典』
2016/5/26発行 NHK 放送文化研究所編

今回の『新辞典』は、1943（昭和18）年に発行された1冊目のNHKアクセント辞典から数えて6冊目となる。NHKアクセント辞典は、これまでに次の5冊が改訂版として発行されている。

- ① 1943（昭和18）年版『日本語アクセント辞典』
- ② 1951（昭和26）年版『日本語アクセント辞典』
- ③ 1966（昭和41）年版『日本語発音アクセント辞典』
- ④ 1985（昭和60）年版『日本語アクセント辞典改訂新版』
- ⑤ 1998（平成10）年版『NHK 日本語発音アクセント辞典新版』である。

※次頁の資料1 歴代の「NHK 日本語発音アクセント辞典」参照

以上の5冊は、太平洋戦争中から、NHKが放送で使う日本語の発音アクセントについて定めてきた“日本語発音アクセントの規範の歴史”でもあるといえる。今回の『NHK 日本語発音アクセント新辞典』の発行は、その歴史に名を残す18年ぶりの大改訂による新版発行となる。

資料1 歴代の「NHK 日本語発音アクセント辞典」



〔「音訊情報室」佐藤孝順より〕

8年間におよぶ『新辞典』の改訂作業の開始は、改訂の目的や編集方針を決定することからスタートした。今回の改訂の目的は、これまでの方針と同様に「放送で用いるのにふさわしいことばの発音・アクセントを示すこと」と決定された。『新辞典』の最大の特徴は、アクセント記号や見出しの立て方を一新していることである。NHKの伝統的なアクセント表記方法や辞書としての語の検索配列に関する一大転換である。また時代の変化に伴って使われるようになってきた新しいことばや、アクセント方法に迷う長い語を約4400語追加し、本編に収録した語数は大幅に増えて約7万5000語となった。アクセントの変更にあたっては、NHKアナウンサーを対象にした4回におよぶ大規模調査を行い、その結果をもとに約3300語のアクセントに変更を加えている。編集事務局が改訂・発行の報告書の中で自ら「『新辞典』と呼ぶにふさわしい大改訂¹⁾と興奮気味に述べているように、今回の改訂が、日本語学、日本語音声学、日本語教育法、辞書編集その他の多岐の分野にわたる大規模な改訂であることは、改訂版の『新辞典』を最初に手にしたときから、初期の調査研究および改訂作業に加わっていた筆者には実感として伝わってきた。

以上のように、今回の『NHK 日本語発音アクセント新辞典』の改訂が大規模かつ広範囲に及

1) 「18年ぶりの改訂で誕生『NHK 日本語発音アクセント新辞典～アクセント記号や見出しの立て方も一新～』NHK放送文化研究所発行『放送研究と調査』(2016年7月号) P.2～13

ぶため、本拙稿では、次のいくつかの点に絞って論考を進めたい。主な考察の論点は、今回の改訂でその表記方法に「新アクセント記号」を採用したこと、アクセント辞典検索の際の見出しを「国語辞典方式」に変更したこと、また改訂の基本方針についての再確認、収録語数の大幅な増加、動詞・形容詞の活用形を本編に掲載したこと、日本の地名アクセント発音の表示方法変更について、などである。

2. 改訂の道筋と編集基本方針について

今回の『NHK 日本語発音アクセント新辞典』の改訂作業は2008年に始まり、8年間の年月を要した。改訂作業を始める際に筆者はNHK放送文化研究所に籍を置いていて、旧版の「アクセント辞典」については、日本語の時代的变化の観点から早期の改訂作業の必要性を感じていた。そこでNHK内で、『NHK 発音アクセント辞典新版(旧版)』については前回の改訂からかなり時間が経過しており、この間に人々の日本語に対する規範意識や社会でのことば遣いも大きく変わってきているため、できるだけ早く『新辞典』への改訂作業に取り掛かるべきである」との意見を具申した。そして、改訂作業の道筋をたてる企画提案と編集事務局などのプロジェクトを立ち上げる作業をすすめて、『新辞典』改訂作業の発起人となった経緯がある。

具体的な改訂作業は、「アクセント辞典改訂専門委員会」を組織することからスタートした。この委員会で『新辞典』の編集方針と基本的な方向性を定めることから取り掛かったのである。「専門委員会」は、外部の日本語研究者・言語学者と、放送現場のアナウンサーおよび編集事務局を務めるNHK放送文化研究所放送用語班員で構成された²⁾。『新辞典』を発行するまでの8年間に合計7回の会議を開き、懸案事項の審議やアクセント調査の方法、編集作業の進め方などの重要事項について何度も議論や検討を重ねて、改訂方針に関する重要方針の決定を行った。

2-1 『新辞典』改訂のための基本方針について

『新辞典』改訂にあたっては、編集事務局でも多くの時間をかけて改訂の「基本方針」について議論を重ねたことを筆者は記録している。『新辞典』発行に向けた改訂作業スタート時点で、この辞典を誰のために、どのような目的で、どのような辞典に改訂するのか、またどのような調査研究でアクセント変更語を決めるのか、いつ頃の刊行を目指して作業をすすめるのかなど、いわば『新辞典』の改訂基本方針をしっかりと決めておく必要があったからである。議論の末、2008年秋には次の資料2に示すような基本方針を定めるに至った。

この基本方針について、『新辞典』の編集において中心的な役割を果たしてきた編集事務局の塩田雄大氏(現NHK放送文化研究所主任研究員)は、刊行された『NHK日本語発音アクセント新辞典』の解説編Iにおける「この辞典で扱う発音とアクセントについて」³⁾の中で、編集事務局の坂本充氏のまとめを引用して次のように説明している。

2) 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』の「改訂専門委員会外部委員」は次の各氏。

相澤正夫氏(国立国語研究所教授)、井上史雄氏(東京外国語大学名誉教授)、上野善道氏(東京大学名誉教授、元日本語学会会長)、水谷修氏(元国立国語研究所所長、名古屋大学教授：故人)(五十音順)

3) 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』付録1 解説編I「この時点で扱う発音とアクセントについて」NHK出版(NHK放送文化研究所編)P.2~6

資料2 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』の基本方針

本辞典の目的は、「放送で用いるのにふさわしいことばの発音・アクセント」を示すことである。「放送で用いるのにふさわしいことばの発音・アクセント」とは、次のような条件を満たすものとする。

- 1 情報伝達の面で伝わりやすい発音・アクセントであること
(意味の違いによるアクセントの区別)
- 2 特定の地域を連想させない発音・アクセントであること
(地域方言性 [東京方言も含む] の排除)
- 3 特定の年代を連想させない発音・アクセントであること
(若者アクセントおよび極端に古いアクセントの排除)
- 4 ある程度あらたまった場面での使用を想定した発音・アクセントであること
(使用想定場面の指定)

NHK 放送文化研究所『新辞典』改訂編集事務局 坂本充 (2008b) より

塩田氏の補足説明によれば、この辞典の改訂作業は、「日本語として『正しい』『美しい』ことばを選び出すとか、ことばとして『味がある』『風情がある』などの観点から選び出すのではなく『現代の公共的な場面での情報伝達的手段として、(蒸留水のように) もっとも無色透明のもの』を選び出すものとして進められるべきである」という意識のもとに立てられたという。

この説明文の中の「(蒸留水のように) もっとも無色透明のもの」という比喩的な表現には筆者は実は少し違和感がある。初期の改訂作業の中でそうした編集方針を殊更に意識して進めてきた思いがない筆者としては、“ことばの浄化”を連想させるような説明文で、いささか行き過ぎた表現と感じるが、『新辞典』発行直前の詰めの編集作業の中では、そうした意識もスタッフの中には生まれていたのかもしれない。ただ筆者は、むしろ極度の「美しさ」「味」「風情」「毒気」「激しさ」を感じさせることばなどは、「公共性」になじまないと判断して調査対象からは外し、公共の場での使用にふさわしい「中庸色のことば」に薄める作業をしていたつもりであって、「無色透明」のことばを集めたという意識は薄い。従って、公共の場にふさわしいほとんどすべてのことばについては、色の濃さは薄まってはいても、様々な色のことば自体は今も『新辞典』の中に存在しているものと考えている。

ただ、ここで採用された基本方針自体に特に問題は感じられず、またこれ以外に公共放送のNHKが取りうる編集方針はないものと、筆者も支持する。この基本方針は、改訂のための調査方法を始め、調査に基づいたアクセント変更、追加語や削除語の選定、新アクセントの付与など、改訂における編集作業のすべての場面で、必ず立ち返って確認すべき最も重要な指針となったという。

今回の改訂のために行った4回のNHKアナウンサー調査では、「調査対象の語を個々のアナウンサーが個人的にどのようなアクセントで使うか」ではなく、「公共放送NHKで使うアクセントとしてふさわしいものだと思うかどうか」という尋ね方をしている。そして、その調査結果をもとにアクセントの変更を加えるかどうかを決定するに際しても、単に調査結果の数字だけを根拠にするのではなく、その発音アクセントがNHKの放送で用いられたときにふさわしいかどうかという観点を重視しながら判断し決定する、という作業を繰り返したという。

このように、『新辞典』の改訂目的が「放送で用いるのにふさわしいことばの発音アクセント」を示すことにあるのであれば、たとえこの辞典に掲載されていない発音やアクセントであっても、『新辞典』での立項の有無を根拠に、“それは日本語として間違っている”とか“使うべきではない”とは言えないことを意味している。つまり、今回発行の『新辞典』は日本語全体の“絶対的な基準”にはできない、いわば“ゆるい規範”のようなものと考えるべきであろう。もとより1冊の「アクセント辞典」に日本語のすべてのことばを網羅して掲載することは不可能であるし、日本語は日々刻々と変化しているのであるから、辞典を発行する側としては至極当然の考え方であるといえる。

この『NHK日本語発音アクセント新辞典』の基本方針については、アクセントの分野で利用者をほぼ二分する三省堂発行の『新明解日本語アクセント辞典』のそれとは大きく異なっていることを指摘しておきたい。『新明解』（第二版）の序には、その基本方針について次のように記されている。

「この私どもの『新明解日本語アクセント辞典』は、純粹の東京の発音、東京のアクセントと見られるものに焦点をあて、俗語や東京なまりの類までとりあげた。そのために資料としたのは、すべて純東京人と見られる人であり、中には、現在では老人層でないといほとんど使われていない形も上げてある。これも特別の用途があるだろうとの考えによるもので、意図するところを諒承されたい⁴⁾」

両者を比較してみると、『NHK日本語発音アクセント新辞典』では「放送で用いるのにふさわしいことばの発音・アクセント」を標榜しているのに対して、『新明解日本語アクセント辞典』では、「純粹の東京の発音、東京のアクセントと見られるものをとりあげ、俗語や東京なまりの類」までとりあげている。『新明解』は上記の説明に続けて、NHKの『新辞典』との編集方針の違いについて次のように述べている。

「NHKの辞典は、一口に言うと全国共通語の発音とアクセントの辞典だ。ということは、必ずしも東京という土地の発音とアクセントを収めたということではない。語形や発音の方で、オッコチルとかシャジ（匙）というのは、東京人の使う言葉であり、東京なまりであるが、そのようなものはNHKのアクセント辞典には採用していない。それに応じて、アクセントの面で東京なまりと判断されるようなものは、省いてある」

『新明解』は明らかに東京弁を基盤として編集され、それを広めていくことを辞典の基本方針としていると解釈できる。そこには、東京弁（その変形も含める）を日本語全体の原型とする考え方がうかがえる。改訂版が出されても、同じ編集方針を取り続けていることが明示されている。一方のNHKの『新辞典』では、初版以来、やや改まった公共の場で意思疎通をはかる際に使うのにふさわしい日本語の発音アクセントの体系を追求し続けている。NHKの『新辞典』では、その基盤をいわゆる「江戸弁」や「東京弁」または「特定の地域」「特定の世代」「俗語・スラン

4) 『新明解日本語アクセント辞典』（三省堂）2014年4月10日第1刷発行、『新明解日本語アクセント辞典』第二版（CD付）の序（金田一春彦）P.5

グ」などに置かずに、いわば「日本の公用語としての理想型」を求めて続けていることになる。似たような「アクセント辞典」に見えるかもしれないが、両者にはこのような違いがあることを改訂作業に加わった1人として改めて指摘しておきたい。

そもそも「辞典」というものは、一般的にどれが「正しい辞典」などということを決めるのは難しく、それぞれの編集方針でそれぞれの内容の辞典が存在してよいと筆者は考える。しかし、時代が移り変わり、東京に日本各地の出身者が流入してきて様々な地域のことばを使い、新たな融合語や融合アクセントが生まれている中で、「東京弁」やそれを使う「純東京人」と言われる人たちがどれほど存在し続けられるだろうか、筆者には疑問が残る。また一方では、ICT時代に入って、様々な音声メディアが発音アクセントに様々な影響を与えている現代日本社会において、NHKが標榜する「発音アクセントの理想型」などというものもあり得るのか、NHKを離れた今、「アクセント辞典」の発行自体が到達点の見えない極めて苦しい作業を重ねているのかもしれないことを痛感する。「日本語発音アクセント」の辞典を編集するという作業は、間違いなく時代のことばの荒波に漕ぎ出す“舟を編む”作業のように思えてくる。だからといって、ビッグデータを活用するような全く新たな編集方法が生まれ限りこの作業を中断することはできない。日本で働く外国人や日本語を学ぶ留学生が増え、日本に観光に來たり暮らしたりする外国人が急増しているからこそ、日本語発音アクセントの「理想型」のような“規範”を作らないと、「日本語」そのものが変質して大きく揺らぎ、やがて消え行く言語になってしまうのではないかという危惧に筆者は襲われる。そういう意味で『NHK日本語発音アクセント新辞典』の改訂作業の役割の重大さは、今後も続いていくものと考えている。

3. 『NHK日本語発音アクセント新辞典』の改訂内容についての考察

前にも述べたように、今回の『NHK日本語発音アクセント辞典』の改訂は、大規模でかつ多岐にわたる。ざっと例示するだけでも、「新しいアクセント記号の採用」「見出しの国語辞典方式への変更」「大規模御調査による収録語数の大幅」「動詞・形容詞の活用形を本編に掲載」「放送に使う地名アクセントの付加表記」「付録解説・資料の充実」「アクセントの変化と傾向分析」「数詞+助数詞のアクセント表示」「鼻濁音（ガ行鼻音）の消滅化傾向」などがあげられる。紙面の都合上、本稿でこれらのすべてについて触れることはできないので、この中のいくつかの項目について筆者の私見と考察を試みたい。

3-1 「アクセント記号」の種類について

まず『新辞典』における最大の変更点である「アクセント記号の変更」について考察したい。今回の改訂では、「NHKアクセント辞典」の利用者が驚くような大きな変更が加えられているが、いきなり『NHK日本語発音アクセント新辞典』における「アクセント記号の変更」の本題について触れる前に、一般的なアクセントの表記法について整理しておきたい。現在、様々なアクセント表記法が使われているが、ここではその中でよく使われる方法をいくつか取り上げる。

【アクセント記号の種類】

英語では単語の中のストレス（強調）の場所で語の違いを表現するが、日本語では、語の中の「音の高低」によって語の意味を表し、語を区別する。

1) 丸式

語の中で、高く発音する拍を●で、低く発音する拍を○で表記する方式。例えば「アクセ

ント」という語のアクセントを表す際には、次のように表記する。

アクセント ●○○○○

●に対応する「ア」が、この語の中で最も高い音程であることを示している。このように語頭の音が高いアクセントを頭高型のアクセントともいう。

2) HL式

語の中で、高く発音する拍を H (high) で、低く発音する拍を L (low) で表記する方式。「アクセント」という語の場合は、次のように表記する。

アクセント HLLLL

「ア」の部分が「H」になっているので最も高い音で他は低い音であることを示している。

3) 線式

語の中で、高く発音する拍の上に線「 — 」を引いて表す方式。音が下がる場合には右下がりの斜線「 \ 」をその拍の後ろにつける。低く発音する拍に対しては、何も線を引かない方式と、文字の下に線を引く方式がある。「アクセント」という語のアクセントを示す場合は、次の表記になる。

ア \ クセント

「ア」の発音の後ろに「音の下がり目」があることを示す。

この方式は、単語とアクセント表記とが一体化しているので一般的によく使われ、見た目にも分かりやすいのが最大の特徴である。NHKの今回の『アクセント新辞典』でもこの方式を採用している。

4) 数字式

語頭から数えて何拍目の後ろで音が下がる核⁵⁾があるかを数字で表す方式である。語の中に音の下がり目が一つもない場合は [0] と表記し、「平板型アクセント」を意味する。例えば、「アクセント」という語のアクセントの場合は次のように表記する。

アクセント [1]

[1] の数字が示す語の1番目の文字「ア」が最も高いアクセントであることを表す。

5) 強調式

語の中の高く発音する拍を**太文字**で表記する方式。文字が大きければ見分けがつくが、小さく細い文字の場合は、印刷の具合によっては見分けづらい。「アクセント」という語の場合は次のように表記する。

アクセント

太文字のゴシック体文字「ア」が語全体の中で最も高い音であることを表す。

6) 文字式

数字式と同じ考え方の表記だが、こちらはアクセントの核となる拍の文字を直接表記する。「アクセント」の場合は、次のように表記する。

アクセント [ア]

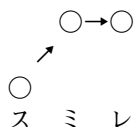
「ア」の音が高いことを示している。

7) 音階式

語全体の音の上下がひと目でわかるように、楽譜の音階のように「○と線」で各拍を結ん

5) アクセントの「核」とは、「その拍の直後に音の下がり目をもつ拍」のことを指すアクセント用語。語の発音が「低—高—低」型であれば、「2拍目にアクセントの核がある」という言い方をする。

で示す方式である。例えば「スマレ」の場合は次のような表記になる。



「ス」の発音から「ミ」へは音が高くなり、「ミ」と「レ」は同じ高さの発音となる。

*矢印でなく単に棒線を引いて示すことも多い。

*これを緩やかな線で結んで、滑らかな線にして表記する場合も増えている。

このほかにも、国際音声学会編『国際音声記号ガイドブック—国際音声学会案内—』（大修館書店）には、上下の矢印を使って音の高低を表す方法について、「通常の音韻記号で示される声の高さに手を加え、[↑]と[↓]を用いて、それぞれの音の高め（upstep）と低め（downstep）を表すことができる」と説明されている。

以上のように、アクセント記号についてはいくつもの表記方法があるが、ここでは『NHK 日本語発音アクセント新辞典』のアクセント記号の変更について、次に考察する。

3-2 『NHK 日本語発音アクセント辞典』の「アクセント記号変更」について

表1 NHK 日本語発音アクセント辞典のアクセント表記方法変更の歴史

- | |
|--|
| ① 1943（昭和18）年版『日本語アクセント辞典』 |
| ② 1951（昭和26）年版『日本語アクセント辞典』 |
| ハナ [¯] ス（話す） オト [¯] コ（男） ジテン [¯] （辞典） |
| ③ 1966（昭和41）年版『日本語発音アクセント辞典』 |
| ④ 1985（昭和60）年版『日本語アクセント辞典改訂新版』 |
| ⑤ 1998（平成10）年版『NHK 日本語発音アクセント辞典新版』 |
| ハナ [¯] ス（話す） オト [¯] コ（男） ジテン [¯] （辞典） |
| ⑥ 2016（平成28）年版『NHK 日本語発音アクセント新辞典』 |
| ハナ [\] ス（話す） オトコ [\] （男） ジテン [¯] （辞典） |

（記号の見方）

『新辞典』で使われているアクセント記号は、音の「下がり目」を表す記号が右肩下がりの斜線「\」で示され、この記号の前の拍と後の拍との間に音の下がり目がある、ということを表している。例えば、「ハナ[\]ス」は、「ナ」の後ろで音が下がるのである。「オトコ[\]」の場合は、この後に助詞がついた際に、語の最後の「コ」と「付いた助詞」の間に音の下がり目があることを意味する。

*1943年、1951年版では、平板型には記号を付けずに表していた。1966年版から“棒カギ式”を採用し、音の下がり目を明確に示すようになった。そして2016年版（今回）からは、「下がり目」を棒の最後に付けたカギではなく、語の途中で「右肩下がりの斜線（\）」で示す方法に変更している。

NHKの発音アクセント辞典は今回の改訂版で6冊目になる。今回改訂発行した『NHK日本語発音アクセント新辞典』における最も大きな変更は、これまでのアクセント記号の表記方法を大きく変えたことである。『新辞典』の1冊前の1998（平成10）年版『NHK日本語発音アクセント辞典新版』では、簡略化して言えば、「音調の高い部分に上線を引く」という方式で、語のアクセントの高低がどの部分にあるのかを示し、音の下がり目には横棒線にカギのついた「┌」という記号を使う「棒カギ式」という方法で音の高低を示してきた。しかし、今回の『新辞典』では、音の下がり目を右下がり斜線「＼」で示し、音の高低のない語（下がり目のない平板型アクセント）の語は、語の上部に棒線「┌」に変更した。さらにこれらの記号が目立つように、記号の部分は赤色で印刷してある。また音の下がり目については、編集事務局の議論の中で、「音の下がり目は、各語の特徴として本質的なものではない」「上がり目は各語や文の流れによって異なるので一律に示すのは難しい」「すべての語の上がり目を記号で示すと、その部分で無理に音を上げなければならないという強制感が働いて自然な音調で発音できなくなる。むしろ示すべきではない」などの意見が出され、結論として『新辞典』では、音の上がり目については示さないこととなった。『新辞典』で使われているアクセントの用語と記号は次のとおりである。

- 「＼」：音の下がり目
- 「┌」：下がり目なし
- 「頭高型」：1拍目のあとで下がる
- 「中高型」：語の途中で下がる
- 「尾高型」：語末で下がる
- 「起伏式」：平板型以外の型の総称

今回の『NHK日本語発音アクセント新辞典』における「アクセント記号」の変更で、「音の上がり目を示さなかった理由」について、前出のNHK放送文化研究所編集事務局の塩田雄大主任研究員は、『新辞典』の付録／解説Ⅱの「アクセントの示し方についてP.7～13」の中で詳しく述べている。以下に、内容を要約しながら引用する。

「……修飾語がつかない単独の形で（語を）発音したときに1拍目から2拍目にかけて音が上がるのは、ほかの語（頭高型の語を除く）でも一般的に起こることであり、いわば普遍的・全般的なことである。つまり、このように音が上がることは、ある語に“固有のアクセント”というわけではなく、頭高型以外の語を単独で発音したときの一般的な性質に伴う現象であると考えた方が自然である。こうした考え方から、この辞典では個々の単語に“上がり目”を示すようなことはしていない」

また、修飾語や修飾節がつくなどして長くなった文章を発音するときに、一語一語の固有のアクセントを守ろうとするあまりに、文章全体としてはぎごちない不自然な音調になってしまう例をあげて、「そうした不自然な言い方を防ぐためには、“上がり目”についてはむしろ示すべきではなく、“下がり目”のみを示すべきである。今回の『新辞典』でこうしたアクセント記号の変更を行ったのは非常に実践的な方法である」と解説している。アナウンサーなどの放送職や音声表現の現場で日々表現や伝え方の研究を重ねている人たちにとっては、「アクセント辞典」を実際的に活用する際に参考になれる、深く肯ける説明ではないだろうか。

また、この章の結びでは、『新辞典』の基本的な性格について次のように言及している。

「この辞典は、日本語の音調のありさまを“説明”しようとするものではない。説明の場合には、音調としてどこが高くどこが低いという「描写（語全体のアクセントの音程的描写：筆者注）を行う必要があるが、この『新辞典』は、ここに掲載された情報を手掛かりとして、自然な音調で発音できるようにするための実践的なツールとして活用されることを、私たちは期待している」

このようなところに、改訂された『NHK日本語発音アクセント新辞典』を利用する際の利用者にとっての『新辞典』の位置づけが表明されていると考えられる。

ここまで述べてきたように、ひとつの語の発音・アクセントを、音声ではなく文字表記で示すのはなかなか難しい。NHKの「アクセント辞典」でも、改訂のたびにその示し方について議論し、様々な声に配慮しながら、最もわかりやすく、語の表記を見ただけでどのような発音アクセントなのかを想像できる表記方法を模索してきている。

ただ、改訂のたびに指摘されることではあるが、今回の『新辞典』で行われた「新しいアクセント記号への変更」についても、今までのアクセント辞典に慣れ親しみ、日本語発音アクセントの規範としてきた発行元のNHKアナウンサーたちにとっても大きな戸惑いや混乱のもとになるであろう。それだけでなく、この辞典を使って語の発音やアクセントを確認したり、新しい語の発音方法を身に付けてきたりした民間放送のアナウンサー、俳優、声優、朗読者、音読・朗読ボランティア、外国人留学生、在日外国人など、この辞典の多くの利用者たちに対しても困惑を感じさせることにもなることが予想される。このことは、発起人の一人であった筆者が企画提案した段階でも既に現場の強い抵抗感を感じていたため、容易に想像がつくことである。しかしNHKが長年の調査研究を踏まえて決断し、この『新辞典』を発行したからには、NHK側には、『新辞典』の使い方などについての説明と解説を広く継続して行う責任があることを指摘したい。『新辞典』の定着に向けて様々な場所と機会を設けて、改訂の趣旨と概要、『新辞典』の使い方などの説明会を全国各地で開催してほしいと願う。『新辞典』を発行しただけでそうした更なる努力をしなければ、『新辞典』の全国的な定着は難しくなることが予見できる。

3-3 見出しを「アクセント型順」から「国語辞典方式順」に変更したことについて

今回の『NHK日本語発音アクセント新辞典』の改訂では、見出しの並べ方を、語の「カタカナ表記順」から「国語辞典方式順」に変更した。辞書類にとって、検索語数と立項順（見出し語の並び）は、利用者数の多寡と利用者の利便性や評価を左右する重要な問題である。辞書の引きやすさや見やすさは、語の解説内容と共に辞書の信頼度に直結する根本テーマだからである。このような辞書の根本に関わる方式を変更することには、大きな決断が必要だったと考える。

これまでの1966年版から前回1998年改訂版『NHK日本語発音アクセント辞典』では、「カタカナ表記順」に見出しを立てる方式をとってきた。したがって、アナウンサーなどの音声関係の仕事をする関係者は、まず自分が検索したい語を発音する際の「音（オン）」をもとに、発音・アクセント辞典で「アイウエオ順」に並べられているカタカナ表記の中から、該当しそうな項目を

複数調べ出し、次に出てきた複数の候補の中から、付記されている漢字を参考にして、調べたい語の発音アクセントを一つに絞って決定したのである。1998（平成10）年版『NHK 日本語発音アクセント辞典新版』の例を次に示すので、これを見ながら具体的な方法を理解していただきたい。

例えば、「こうほう（広報）」という語のアクセントを調べたいときは、まず「コーホー」という音を頼りに該当しそうな語を一旦すべて洗い出し、次に、出てきた複数の語の中から漢字の「広報」を頼りにして、調べたい語の発音・アクセントをひとつ見つけ出し、「広報」の発音アクセントが $\overline{\text{コ}}\text{ーホー}$ という頭高型アクセントであることを最終決定するのである。このように、各語の発音アクセントを探し出すたびに二段階の作業をしてきたのである。また、この辞典の記号を理解している人（例：長音を「—」で表すことなど）以外の利用者は、はじめから調べ方がわからずに立ち往生したり、別のアクセント辞典を購入したりすることになっていたのである。

1998年版『NHK 日本語発音アクセント辞典新版』表示例

$\overline{\text{コ}}\text{ーホー}$	広報、工法
$\overline{\text{コ}}\text{ーホー}$ 、 $\overline{\text{コ}}\text{ー}\overline{\text{ホー}}$	公法、公報
$\overline{\text{コ}}\text{ー}\overline{\text{ホー}}$	後方、後報、高峰
$\overline{\text{コ}}\text{ー}\overline{\text{ホー}}$ 、 $\overline{\text{コ}}\text{ー}\overline{\text{ホー}}$	航法

しかし、筆者のように放送現場にいた人間からすると、放送が直前に迫っていて時間のないときに、こうした二段階の作業を語ごとに行い続けるのは非常に煩雑な作業であった。時間がないときには結局記憶や習慣に頼ることにもなり、結果として発音・アクセントの間違いを誘うことにも繋がる。そこで『新辞典』では、次のように表示されている。

2016年版『NHK 日本語発音アクセント新辞典』表示例

こうほう	【工法】	$\overline{\text{コ}}\text{ー}\overline{\text{ホー}}$	<input checked="" type="checkbox"/>
こうほう	【公法】	$\overline{\text{コ}}\backslash\text{ー}\overline{\text{ホー}}$	<input type="checkbox"/>
こうほう	【公報】	$\overline{\text{コ}}\backslash\text{ー}\overline{\text{ホー}}$	<input type="checkbox"/>
こうほう	【広報】	$\overline{\text{コ}}\backslash\text{ー}\overline{\text{ホー}}$	
こうほう	【後方】	$\overline{\text{コ}}\text{ー}\overline{\text{ホー}}$	
こうほう	【航法】	$\overline{\text{コ}}\text{ー}\overline{\text{ホー}}$	<input checked="" type="checkbox"/>
こうほう	【高峰】	$\overline{\text{コ}}\text{ー}\overline{\text{ホー}}$	

*およびは、が【第1アクセント】、が【第2アクセント】を示している。
 *という印は、語中の「コ」の次で下がり目がくすることを示している。つまり、平板型や尾高型でない【 $\overline{\text{コ}}\backslash\text{ー}\overline{\text{ホー}}$ 】であることを示している。
 *は、その語の第2アクセントが平板型であることを示し、【 $\overline{\text{コ}}\text{ー}\overline{\text{ホー}}$ 】も認めることを意味している。

この表示方法であれば、国語辞典と同様に、「こうほう」という音を頼りに列挙されている語の中から「広報」を選び出して「 $\overline{\text{コ}}\backslash\text{ー}\overline{\text{ホー}}$ 」という頭高のアクセントであることをすぐに確認できる。つまり、1語に1つのアクセントが対応する形で表示されているため、極めて探しやす

くなったのである。このアクセント型の表示方法の変更について筆者は基本的に支持をするが、第2アクセントの表示法については賛成しがたい。筆者の判断で、前頁の下段に「*」印で各記号の意味と解釈の仕方を説明したが、この新しい表示方法には次のような懸念が残る。

- ①今までのアクセント辞典に無かった新しい記号がいくつか登場し、その意味と解釈を理解する煩雑さが生じ、慣れるまでに時間がかかること
- ②第1アクセントと第2アクセントの表示の間に“スペース（空間）”がないために、第1アクセントの続きのように見えてしまうという表示の問題

こうした問題は、利用者に新たな混乱と戸惑いを招きそうな懸念につながる。したがってこの点については、まだまだ工夫が足りない指摘せざるを得ない。この表示の仕方については、第2アクセントが存在することを記号やスペースを使って分かりやすく表示したり、新しい記号の意味を各ページの下段に印刷したりするなどの工夫と配慮をすべきであったと考える。できれば、版を重ねる中で、さらに分かりやすい表示方法について今後検討していただき、第2版以降で「ミニ改訂」などをしてほしいと願う。

とはいえ、この見出し（立項方法）の変更によって、語の発音から探し始める煩雑な二段階の検索作業をしなければならない、というこれまでの「日本語発音アクセント辞典」検索方法の欠点やジレンマ、イライラが解消され、語のアクセントをすぐを知ることができるようになった。つまり、『新辞典』の見出し語を国語辞典と同じ手順で調べれば、すぐに「1対1」で、探したい目的の語の発音アクセントを確認できるということになったのである。これで音声表現者や利用者が語を検索する思考過程と一致する手順で調べることができ、利用者の希望に沿う形の「アクセント辞典」が実現することになったのである。筆者はこの点を、これまでの歴代の「NHK日本語アクセント辞典」から一歩進んだ、『新辞典』の大きな改善点の一つとして評価したい。

3-4 収録語数を約7万5000語と大幅に増やしたことについて

「NHK日本語発音アクセント辞典」には、他の「アクセント辞典」と比較してその収録語数が少ないことに対する利用者の不満がこれまで聞かれていた。放送で使われる際にふさわしいことばを掲載する「アクセント辞典」は、一般に社会生活のなかで使われる「流行語・新語」や「若者ことば」「誹謗・中傷語」、「差別語」などについては、掲載することに対して慎重な姿勢をとってきたことが影響していると思われる。そのため、利用者が調べたいと思う語が「見出し語」に無いこともあったわけで、それが「社会の実態を反映していない」という声に繋がってきたとも考えられる。しかしこの点については、筆者は未だに、「悪意を持ったことば」など、およそ放送で使うべきではないとされることばまで掲載することに疑問を抱いている。ただ社会で使われる日本語は未来永劫に変化しないわけでもないので、改訂の時期などに合わせて「新語」と「死語」などについては調査研究をして、一部を入れ替える作業は必要であると考えます。

今回の『NHKの日本語発音アクセント辞典』の改訂では、編集事務局が語数も含めて慎重に調査研究をしたという。時代の変化に伴って新たに使われるようになったことばや、現在の実際の放送では頻出しているが、前の「アクセント辞典」には掲載されていない語などを拾い出して調査検討し、新たに追加すべき語と、すでに日常生活で使われなくなった古語に近い語などの削除語に選り分けて、最終的に約4400語を追加している。これによって、新しい『NHK日本語アクセント新辞典』の収録語数は約7万5000語となり、前回1998（平成10）年版『NHK日本語発音アクセント辞典新版』に比べて大幅に増えている。既出の三省堂発行の『新明解日本語アクセ

ント辞典（第2版』の収録語数が7万6600語であるから、それと比較してもほぼ同規模となったといえる。

今回の改訂では、これまであまり掲載されてこなかった「四字漢語」「アクセントが難しい長い複合語」などのほか、日常生活でよく使われるようになってきた「動植物名」「料理・食材名」「スポーツ用語」など多様な分野の語を充実させたことが特徴となっている。資料3に、今回追加された「追加語」の例を引用させていただく。

資料3 『NHK 日本語発音アクセント辞典新版』の追加語の例

政治	議員立法、政治活動、当選確実、日米安全保障条約、非改選議席、非拘束名簿式、不信任決議、無党派層
経済	確定拠出年金、公的資金、固定資産税、財政健全化、高止まり、日銀短観、非正規雇用、含み損、マクロ経済、雇い止め
社会	アイドルリングストップ、後期高齢者医療制度、孤独死、裁判員、就活、待機児童、ドメスティックバイオレンス、ニート
化学・科学	青色発光ダイオード、遺伝子組み換え、線量計、ニュートリノ、放射性セシウム
医療・福祉	iPS細胞、グループホーム、ケアマネージャー、ジェネリック医薬品、睡眠時無呼吸症候群、認知症、バリアフリー
学校・教育	AO入試、学習指導要領、食育、総合学習、卒業論文、登下校、モンスターペアレント
文化・流行	アンチエイジング、エコバッグ、恵方巻き、オフ会、顔文字、スマートフォン、電子書籍、部屋干し、ワークシェアリング
コンピューター・情報	オンデマンド、ダウンロード、タッチパネル、テンプレート、バージョンアップ、バナー広告、ビッグデータ、無線LAN、ログイン
気象・災害	液状化、温室効果ガス、帰宅困難者、記録的短時間大雨情報、緊急地震速報、地球温暖化、土砂災害警戒情報
四字熟語	会社訪問、家事分担、観客動員、経費負担、権力集中、資金提供、人口減少、責任追及、組織改革、停戦監視、停戦合意
長い複合語	大阪管区気象台、核拡散防止条約、危険運転致死傷罪、公判前整理手続き、児童虐待防止法、特定非営利活動法人、不正アクセス禁止法違反

『放送研究と調査』（2016年7月号）より

この掲載語の変更を概観すると、次にあげるようないくつかの方向性が見えてくる。

- ① 「政治」「経済」の分野では、「非拘束名簿式」「確定拠出年金」のようにニュースや時事問題で頻出している語については、積極的に見出しに取り上げる傾向にある
- ② 「社会」分野では、「アイドルリングストップ」「後期高齢者医療制度」「ドメスティックバイオレンス」などの長いカタカナ語や複合語などについても、そのまま見出しに採用している
- ③ 「化学・医療」などの分野では、「青色発光ダイオード」「iPS細胞」「ジェネリック医薬品」など、世界的な関心を呼んだものについては時間を置かずに採用している
- ④ 「教育・文化」の分野では、「AO入試」のような（アルファベット＋漢字）の語や「モンスターペアレント」「アンチエイジング」「ワークシェアリング」など、これまでのNHKでは外

国由来のカタカナ語をなるべく使わずに日本語に言い換えて使うように努めてきた語についても、そうした“翻訳語”が社会一般になかなか定着しないことや、日本語への言い換えが難しいのを見てか、カタカナ語のままアクセント辞典に掲載する傾向が見える

- ⑤ 「気象・災害」や「長い複合語」も、「記録的短時間大雨情報」「危険運転致死傷罪」「公判前整理手続き」などのように、ニュースの中で一度説明を要する語を読み上げたあとで、続けて語の内容を簡潔に説明する方法を前提にしたような語も取り上げている。

3-5 動詞・形容詞の活用形を本編に掲載したことについて

動詞や形容詞については、これまでのアクセント辞典では、「終止形」のみが示されていたため、その活用形（未然形、連用形、連体形、假定形、命令形）となると、発音・アクセントがどのように変化するのか迷ってしまうことがあった。これでは活用形のアクセント型については、個人の知識・経験と推測で判断するしかなくなる。特に出身地のアクセントに慣れている地方出身のアナウンサーらが、NHKが採用している「日本語共通アクセント」で活用形がどのような発音になるのかを調べようとしても、その役割を果たせなかったのである。そこで編集事務局では、今回の改訂で、使用頻度の高い動詞の約1100語と形容詞約200語を選び出し、終止形に加えて、活用させた形のアクセントも本編中に掲載している。表示の仕方を次に例示する。

(例1) 動詞

あつかう【扱う】

- アツカウ^一 (終止形)
アツカワナイ^一 (未然形 ~ない)
アツカイマ^ス (連用形 ~ます)
アツカイ^一 (連用形 中止法)
アツカッテ^一 (連用形 ~て、~で)
アツカエ^バ (假定形)
アツカエ^レ (未然形 ~う)

*一部省略

(例2) チガウ【違う】

- チガウ^一 (終止形)
チガワナイ^一 (未然形 ~ない)
チガイマ^ス (連用形 ~ます)
チガイ^一 (連用形 中止法)
チガッテ^一 (連用形 ~て、~で)
チガエ^バ (假定形 ~ば)
チガウ^レ (未然形 ~う)

最近の学生や若者は、動詞や形容詞の語尾の部分で、文法を無視して自分たち流に勝手に変えて使ってしまう傾向があり、こうした語尾のアクセントの修正にも今回の改訂は役立つのではないかと考える。例えば、(例2)の「違う」という語の活用形アクセントを考えてみる。すると□で囲ったように、連用形では「チガッテ^一」という表現・アクセントが正しいことが分かり、多くの学生が使っている「チガクテ^一」や「チガ^レクテ」「チガク^レテ」という言い方は、基本

的な活用変化としては間違っていることが一目瞭然で理解できるはずである。

ここでひとつ指摘をしたいのは、この『新辞典』が取り入れた活用形とアクセント変化の表記は、放送現場で使用するアナウンサーらの声を優先した結果なのかもしれないが、一般にはなじみが薄いのではないだろうか。特に、連用形の音便による変化を細かく示し、そのアクセントを順に示すというこの方法は、この辞書を使い慣れていない人にとっては分かりにくい。むしろ、多くの人が学校教育の中で身に付けてきたと思われる、「未然形」「連用形（音便変化）」「終始・連体形」「假定形」「命令形」の活用変化に合わせてアクセント変化も表示する方が分かりやすいと筆者は考える。『新辞典』については、NHK や音声表現の関係者だけでなく多くの一般市民の利用者もいるわけで、そのことに思いを致すとき、一般の利用者が使いにくい辞典にならないように、今後議論を重ねて工夫をしていただきたいと考える。

3-6 『新辞典』の地名アクセントに「地元放送局のアクセント」を付記したことについて

『新辞典』では、引き続き「日本地名のアクセント」を掲載している。掲載した日本地名については、放送でよく使われる地名や著名な地名を中心に3000語余りを選びだしたという。都道府県、市町村、山、河川、湖、島、半島、湾、海などの名称のほか、旧国名や世界遺産の名称が掲載されている。

日本の地名のアクセントを決めることは非常に難しい。大阪生まれの筆者も全国共通アクセントと地元アクセントの違いに悩まされた経験をもつ一人である。例えば、「名古屋」のアクセントについては、地元に住む人々は「ナゴヤ^一」という平板型で発音することが多い。ところが全国放送でのアクセントは「ナ\ゴヤ」と語頭の「ナ」の部分の発音が高い「頭高型」のアクセントで発音する。他の都道府県などから名古屋に旅行などで行ったことのある人は、普段耳にしている発音と地元の人々の発音アクセントの違いに驚かされることもあるだろう。名古屋に住み続ける人たちと他地域から新たに流入してきた人たちとの間でのアクセントの違いや、発音のしやすさに対する感じ方の違いなどが相俟って、こうした「地元アクセント」と「全国共通アクセント」との違いや違和感が起こってきたとも考えられる。

これまでNHKでは、全国放送の場合は、全国的に広く使われているアクセントを用い、地域放送などでは番組担当者の判断で、その地域になじみのあるアクセントを用いてもよいことになってきた。地元の人々にとって地名は身近ものであるため、今回の改訂で『新辞典』に「NHKの地域放送局が採用しているアクセント」を新設したのも大きな変更点の1つである。日本の地名アクセントについては、全国的にわかりやすく親しまれたものにするため、NHKでは全国で広く使われるアクセントを採用し、第1アクセントで示してある。ただ、地元ではこれとは異なるアクセントで発音する人が多い場合もあり、全国の各地にあるNHKの各放送局も地元の地名アクセントに関する調査を行い、地元の放送局が採用しているアクセントも同時に確認したのである。そして、全国放送で使われるアクセントと地元の放送局が主に使うアクセントが異なる場合には、「地元放送局アクセント」として「地元放送局では(○○○○)も使う」という表現で追記することにしたのだという。例えば、次のような表記で示してある。

《例》 いな【伊那】[地名] (長野) イ\ナ
(地元放送局では「イナ\」も使う)

まえばし【前橋】[地名] (群馬) マエ\バシ
(地元放送局では「マエバシ」も使う)

ここでいう「地元放送局アクセント」とは、その地名のある地元のNHKの放送局が、全国放送および地域放送(地元放送)の双方で主に使うアクセントを指しており、地元に住む人々が普段の生活で使っているアクセントと必ずしも一致するとは限らない。「地元」といっても、人によってはアクセント感覚が異なるので、地域住民全員が「一つのアクセント」で統一できることの方がむしろ少ないと言わざるを得ない状況になっている。したがって、地元で長く住み「自分の発音が地元の発音である」と信じて疑わない人にとっては、納得のいかない説明になってしまうかもしれない。今回の改訂で、NHKが付録(旧版)でなく本編で採用した「NHKが放送で使う地名アクセント」の根拠をもう少し明確に説明する必要があるであろう。「地名アクセント」は地方にとっては「文化」そのものであり、全国放送が地域文化への侵略や地方文化の衰退・消滅を招く圧力となると恐れ、危惧する地域の人も少なからずいるからである。

4. 今回の改訂の基になった大規模調査について

今回の調査の一番の特徴は、これまでの調査に無かったほど多数の語を調査したことである。予備調査(第1回)に続いて本調査に位置づけられる第2回と第3回を合わせて約5500語におよび、前回改定時の調査語が900語であったことと比較するとその規模の大きさがわかる。このように規模が大きくなったのには、次のような理由がある。

- ① ある語のアクセントを変更するにあたっては、主観や他の辞書の記述に左右されずに、調査結果の数値に基づくことを基本原則としたこと。また前回までの改訂作業では、調査を実施していない語については、他の辞書の記載や同類の語の変化傾向をもとに変更を加えたものもあったが、今回は独自に多くのデータを収集することを基本方針としたこと。
- ② 調査技術・環境の進歩・発達で多数の語の音声調査が可能になったこと。前回までの調査では、協力者に文字で用意した例文を読み上げてテープに録音してもらったものを送ってもらい、事務局のスタッフが聴き取る方法であったため、膨大な時間と手間がかかっていた。しかし、NHK内にイントラネットが整備され、各局のアナウンサーがパソコンで音声を聴き取って個人の判断を送信できるようになったので、一時に大量の調査を行うことが可能になった。

どの辞書の改訂の場合でも、何らかの調査を行い、その結果を基にどれくらいの項目にどのような変更を加えるのかという内容を検討する。NHKの「アクセント辞典」の場合も、NHKアナウンサーを対象にした調査を中心に、東京の山の手と下町に暮らす中学生と保護者を対象にした抵抗感調査、東京(関東)・大阪(関西)・豊橋(中京)でのアクセントの地域差調査、同業者である民間放送のアナウンサー調査など、様々な方法で調査を実施してきた。調査手法も、筆記式、音声聴取式、録音式と様々な形で調査を行ってきた。

今回のNHKの『新辞典』改訂作業では、編集事務局とNHK放送文化研究所放送用語班のスタッフが、NHKアナウンサーを対象に、2008年からの7年間で、目的や手法の異なる4回の調査を行っている。調査方法や内容についての詳細は、次の調査概要(表2)の一覧を参照していただきたい。筆者はこのうちの第1回と第2回の調査に参加しているので、調査自体がいかに大

変な作業かを実感している。このように『新辞典』においても、基本的には、改まった場できちんとしたコミュニケーションをとる必要のある状況を前提にして、その機会を多く経験するNHKの放送現場のアナウンサーの経験や知識のある人を対象にしてアクセント調査を行った。

表2 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』改訂までの調査概要

調査回	実施日	名称	調査方法	回答者 (NHKアナウンサー)	調査語	備考
1	2008年 10～11月	全項目調査	指摘式	498人	本編6万9,000語 +付録7,000語	53のグループ、各10人前後(若年、中堅、ベテランを均等に)。1人あたり約1,500語担当。
2	2009年 10～11月	アクセント 調査	音声聴取式	471人	3,021語 (6,500型)	20人のグループ分け(若年、中堅、ベテランの割合を均等に)。局内イントラを使い、音声ランダムに聞いてもらい、片ごとに「○」「×」「☆」で回答。1人あたり約325アクセント型担当。
3	2013年 5～9月	アクセント 調査	筆記選択式	中堅・ベテラン 126人	2,521語 (5,299型)	調査表に示されたアクセント型ごとに「○」「×」「☆」で回答。全員全問回答。
4	2014年 6～7月	鼻濁音調査	筆記選択式	中堅・ベテラン 67人	141語 (282型)	調査表で示された濁音・鼻濁音ごとに「○」「×」「☆」で回答。全員全問回答。

注「○」：放送で使うアクセント(発音)としてふさわしい「×」：ふさわしくない「☆」：このことばを口に出して言ったことがない

4回の調査のうち、第1回調査は、「本調査(第2回、第3回)」で調べるための語を選定する予備調査に位置づけられるが、この調査ではNHKの全アナウンサー(約500人)を複数のグループに分けて、1語あたり約10人(若手、中堅、ベテランの割合を均等に設計)にアクセントチェックをしてもらった。そして、「現在のアクセント辞典のアクセントを変更すべき」という回答を集計した結果、約1万2000語のアクセント変更対象語を洗い出した。これは、その語の改訂作業の重要な基礎資料となった。

第1回の結果で「変更すべき」という指摘人数が多い語を、第2回の調査でNHKアナウンサー全員を対象に実施し、次いで第3回調査で中堅以上のアナウンサー経験が豊富なアナウンサーを対象にアクセント調査を重ねるという方法で調査を進めた。これをイメージ化したものが次の図式である。

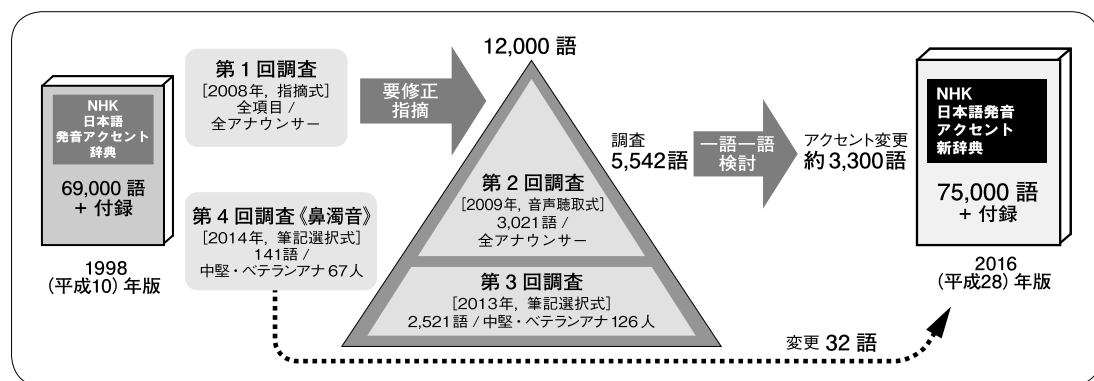


図1 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』改訂のための調査イメージ図式(『放送研究と調査』より)

こうした調査結果を基に、編集作業では削除語、追加語、アクセント型変更語などの検討を行った。これまでのアクセント辞典で示していたアクセント型について、アナウンサーの支持率が30%未満の少数派のものを「削除語」に、50%以上のものを新しいアクセント型の「追加語」に、

第2アクセント型の支持率が第1アクセント型の支持率を30%以上に達したものを「アクセント型の順序変更語」の候補にあげた。そして数値だけでなく、各語の性質や語源・意味・歴史を踏まえて検討・判定して、最終的には3300語に変更を加えたという。実に膨大な作業であったことを付記し、改訂作業にあたったスタッフをねぎらいたい。

5. 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』で各語のアクセントはどう変わったか？

こうした大規模調査を経て改訂された『NHK 日本語発音アクセント新辞典』で、アクセントはどのように変わったのであろうか。新語、漢語、外来語などでかなり大胆なアクセント変更が行われることになったが、紙面の関係上、すべての分野について触れることはできないので、筆者が着目した8項目の点について触れる。

① 4拍和語の平板化傾向

和語（日本固有の語、やまとことば）のうち4拍語のアクセントが平板化する傾向は前回の改訂時にも指摘されていたが、今回もその傾向が多くみられたこと。

- ・他のアクセント型から平板型を第1アクセントにした語
あかすり、雨傘、とじぶた、ねぎらい、はらわた、べにぎけ、やり投げ
- ・平板型を追加された語
雨靴、しめさば、練り物、花筒、ゆで麵

② 二字漢字の頭高型アクセントへの移行傾向

二字漢字については以前から頭高型アクセントになる傾向が強くみられているが、今回の調査でもその流れは進んでいて、新たに頭高型アクセントに変化している語も増えた。

- ・新たに頭高型アクセントを追加した語
遠近、顕示、鉱石、採択、座長、市制、資本、処断、しん帯、心拍、頭巾、賃貸、転機、討伐、乳腺、廃炉、羊水
- ・平板型アクセントが削除されて頭高型アクセントのみになった語
医療、隕石、緩急、眼中、強弱、原点、口論、斜面、執念、焦点、前回、体温、代金、暴露、野心、与党、料金、林業

③ 後ろが一字の漢語の平板化傾向

「○○品」「○○会」のように、後ろに一字の漢字が付く語は、従来の中高型アクセントから平板型に移る傾向がある。

- ・中高型アクセントを削除し、平板型のみになった語
国際法、自閉症、紹介状、食料品、水平線、退職金、太陽系、病原菌、弁護人
- ・新たに平板型アクセントを追加した語
化粧水、検査薬、護衛艦、指南役、謝恩会、生徒会、世界史、断熱材

④ 外来語の平板化傾向は進行中

外来語の平板化傾向は進んでいて、69語に平板型アクセントを新たに追加した。

- ・新たに平板型アクセントを追加した語
ウォーキング、キャラクター、グラス、クレーター、ゲージ、ジョッキ、スピーカー、ナレーター、パネラー、ユーザー、ラベル

⑤ アクセントの違いによって意味の使い分けを明確にした語

同じ語でもアクセントが異なると意味が異なる語、逆に言えば、アクセントを違えて発音することによって意味の違いを表す語を、明確に区別して表示した語。

- ・クラブ
 - ⇒ [ク\ラブ] テニスクラブに所属する (クラブ活動など)
 - ⇒ [クラブ^ー] クラブで踊る (六本木のクラブなど)
- ・ネット
 - ⇒ [ネ\ット] ボールがネットに触れる (網)
 - ⇒ [ネット^ー] インターネット

⑥ 平板型アクセント形容詞の中高型アクセントへの統一傾向

形容詞は中高型アクセントが多く、少数派の平板型アクセントの形容詞も中高型アクセントに移行する傾向が進み、中高型アクセントで統一される傾向が見える。

- ・新たに中高型アクセントを追加した語
 - 明るい、浅い、甘い、遅い、重たい、悲しい、煙い、冷たい、つらい、眠い、眠たい、平たい、優しい、易しい

⑦ 「数詞+助数詞」のアクセント変化

いま、数詞；助数詞のアクセント型が若い人を中心に大きく変化しようとしている。今回の改訂では、「数詞+助数詞」のアクセントを全面的に見直して、整理をしている。

2つの「数詞+助数詞」のアクセント例を示す。

- ・「数詞+円」のアクセント
 - 1円 [イチエン^ー、イチ\エン]
 - 2円 [ニエン^ー、ニ\エン]
 - 3円 [サンエン^ー、サ\ンエン]
 - 4円 [ヨ\エン]
 - 5円 [ゴ\エン]
 - 6円 [ロクエン^ー、ロク\エン]
 - 7円 [ナナ\エン]
 - 8円 [ハチエン^ー、ハチ\エン]
 - 9円 [キュ\ーエン]
 - 10円 [ジュエン^ー]

*上記の「数詞+円」では、「1円」「2円」「3円」「6円」「8円」のアクセントに、中高型アクセントが追加された。平板型アクセントが起伏化する傾向が見える。

- ・「数詞+分」のアクセント
 - 1分 [イ\ップン]
 - 2分 [ニ\フン]
 - 3分 [サ\ンブン]
 - 4分 [ヨ\ンブン]
 - 5分 [ゴ\フン]
 - 6分 [ロ\ップン]
 - 7分 [ナナ\フン]
 - 8分 [ハチ\フン、ハ\ップン]
 - 9分 [キュ\ーフン]
 - 10分 [ジ\ップン、ジュ\ップン]

*最近、関東地方の若者の間でも流行している「ヨンフン」という濁らない発音は採用さ

れていない。

その他、話題に上ることの多い「2月」「4月」の発音アクセントでは、若者や若手アナウンサーの間でもよく使われる頭高型アクセントについて、NHKアナウンサーからの変更希望はなく、平板アクセントのまま、2がつ [2月]「ニガツ」、しがつ [4月]「シガツ」とされている。

⑧ 揺れる鼻濁音（ガ行鼻音）発音

毎回の調査で審議テーマに上る「鼻濁音（ガ行鼻音）」については、「やがて鼻濁音の表示は必要なくなるかもしれない」と言われるほど発音する人または発音できる人が減少し、発音自体の衰退が指摘されている。当のNHKのアナウンサーでさえ、鼻濁音の発音を正確に出せる人は半数以下になっているとの内部調査もある。また、地域によっては鼻濁音の発音自体が存在しない、幼少期から聞いたことがないという人も増えていて、日本語の発音の一つとして調査対象に含めるべきかどうかの議論が今回行われたという。結局、改訂専門委員会の委員から「今回は調査に基づくアクセント変更を行っているのだから、鼻濁音についてもデータを集めるべきだ」との指摘を受け、鼻濁音調査を追加実施している。その結果、いくつかの語について鼻濁音優先と濁音優先の順位が逆転した。

- ・鼻濁音優先から濁音優先に変更
 - 楽団（1. 濁音 2. 鼻濁音）
 - 楽器（1. 濁音 2. 鼻濁音）
- ・濁音優先から鼻濁音優先に変更
 - 議会（1. 鼻濁音 2. 濁音）
 - 不合格（1. 鼻濁音 2. 濁音）

6. 『新辞典』に対する社会の反応について

『NHK 日本語発音アクセント新辞典』が発行されてからこの拙稿を認めている現時点までに9か月が経過している。この辞典の改訂作業の発起人で初期の調査研究作業に携わった1人として、この『新辞典』が社会にどのように受け止められているかが気になり、ネットでその評価を検索してみた。次のような反響がみられた。

- ・18年ぶりのなね！買ってびっくり、慣れ親しんだアクセント記号じゃない！
うむーうむー！慣れない！すごく難しい！
でも、万人に分かりやすいのはこの表記なのかな。
同業の方、買って間違いなくびっくりしますよ！わたしは腰を抜かしました。
でも、アクセントも時代と共に変化してるから、必須な一冊と思います。（「アクセント辞典」利用者）
- ・新しくなった『NHK 日本語発音アクセント辞典』なかなか使い勝手がいいような……。以前は地名のアクセントが付録部分にあったのですが、今回から本編に移動！探しやすくなりました。……動詞や形容詞の活用形もやはり助かっています。「三階」「三軒」などの「数詞＋助数詞」も1～10000まであり、複合名詞も載っています。これも結構便利。購入を迷った辞典でしたが、実際使ってみたら「結構、使えるわね」と思った次第。
（みやぎ朗読奉仕会ブログ10・10付投稿より抜粋）
- ・（アクセント記号の変更は）今までの「棒カギ式」の表記に慣れてしまったボクとしては戸惑

う。でも業界にいない友達に比較してもらったら。「『下がり目式』のほうが分かりやすい」ってことだ。そうなのか！……従来の「頭高」「中高」「尾高」といった言い方はでてこない。この辞典で学ぶ限り、そういう知識がなくてもアクセントが分かるようになっている。(ラジオパーソナリティー、スポーツアナ、声優、朗読家)

- ・今回は「革命的」ともいえる大改正がありました。それは「アクセント記号」の一新です。今回は全く新しいやり方になっていて驚きました。音の下がり目に斜線「\」を使っています。NHKもまる50年間続けてきたやり方を変えたのは勇気があることだったと思います。……私も学生の時から四半世紀以上慣れていたので、早く新しいやり方を覚えないと、少し大げさかもしれませんが、windowsとmacぐらいの違いがあるんじゃないかと。全国のアナウンサーにとっての「大革命」。

(S元民間放送アナウンサー／現フリーアナウンサー)

- ・これで5回目の改訂となるNHKのアクセント辞典ですが、「現代のアクセント辞典」と謳っているだけあって、これまでとはくらべものにならない大規模な改訂になりました。……アクセントの記号が変わると同時に、これまで正しいとされてきたアクセントについても、いまではほとんど使われていないものは削除され、実際の放送でよく使われているアクセントに変更されています。このような改訂はもちろん現代の事情に合わせたものですが、これまで一生懸命正しいアクセントを覚えようとしてきたベテランアナウンサーにとっては、また新しいアクセントを覚え直さなければいけないということで、戸惑っている人も多いようです。(『Suzie』の6,07付Mアナウンサーブログより)
- ・(今回の)アクセント記号の方式の変化は、単にアクセントの表し方の違いというだけではなく、日本語のアクセントをどう捉えるか、というアクセント観の変化が生かされています。これまで、日本語のアクセントについては、「高低の二段階である。一拍目は低く、二拍目からは高い」のような「高低アクセント」として説明されるのが一般的でした。しかし、これらの特徴は、実は「単語を単独で発音したときの高低のパターン」であって、日本語のアクセントそのものの特徴ではなかったのです。……日本語のアクセントを、単語より大きい単位で見たとき、(単語の中の音の高低とイントネーションの中の高低に)矛盾が起きてしまうのです。そのためこれまで、「句や文になったらアクセントが変わる／消える」のような苦しい説明をするしかありませんでした。これに対し、今回の改訂で取り入れられた方式では、アクセントをあくまで「下がり目」があるかないか、あるとしたらどこにあるか、と考えます。そうすることで、単語を超えた長い単位で見た場合も、「アクセント(核)があれば下がる」という簡単な原則で説明できることになります。……この改訂で、NHKにアクセント新辞典がこの「下がり目」方式を採用したことで、日本語のアクセント観自体が、これまでの「高低」から「下がり目」へと変わっていくと考えられます。このことは、日本語音声教育にとって、とても大きな意味を持っていると言えるでしょう。(I日本語国際センター専任講師／国際交流基金日本語教育通信本ばこ『NHK日本語発音アクセント新辞典』より抜粋)
- ・18年ぶりに改訂された今回のアクセント新辞典に新しく登場した地名について、……辞典の前説では、「日本の地名については、全国的に広く親しまれているアクセントとは別に、当該地名のあるNHKの放送局が、全国放送および地域放送の双方で使うアクセントがある場合がある。この辞典ではこれを「地元放送局アクセント」として「地元放送局では……も使う」という形で掲載した。……では、まず何を根拠に「全国的に広く親しまれているアクセント」と言っているのか。「地元放送局では……を使う」と注釈を変えてほしいくらいです。全国から見

ると小さな地方かもしれませんが、そこでは長い間使い慣れてきた地名の読み方やアクセントが定着しています。それは地域の文化と言っていいくらい大切なものです。要するに、「全国（東京）で使っているこのアクセントに統一しなさい」と“上から目線”で言われているような感じ。（大分・バリアフリー上映会へようこそ アクセント新辞典その2「地名について」2016.6.05投稿より要約）

・最初は「なんじゃこりゃ！」状態でしたが、よく見てみると……なんかわかりやすい感じがします。収録語数も増えていきますね。地名も充実っということ（ママ）、出身地の「富士宮」を調べてみると……あれ、フジノミヤって平板型だけではないような気がします。特に年配の方は「フジノミ\ヤ」と発音されているので、「下げるのもあり」と思っていましたけど違うのかな？時代の流れで平板型だけ残したのでしょうか？と、ページをめくると、「解説編」に編集方針（掲載基準）が載っていました。“言うまでもなく、「地域方言」や「若者アクセント・極端に古いアクセント」が間違っているわけではない”……この“間違っているわけではない”というのが大切なのではないのでしょうか？「辞典に載っているからこれでなければダメっというわけではなく「指針」なのではないでしょうか。ナレーションの録音の現場でも、お客様の会社や業界、地域によって微妙に発音が異なっていることがよくあります。ですので、基本はこれだけけど「どちらの方がより伝わるのか？」を常に意識してディレクションできればなっと、深く思った次第です。（続・みんな大好き『NHK日本語発音アクセント辞典』のブログ12・26付投稿より）

このように様々な反響が寄せられており、編集にあたったNHK放送文化研究所の編集事務局も把握しているようだ。概ね、「声」を生業とするアナウンサーや俳優、声優、朗読者、朗読ボランティア、国際協力関係の日本語教育担当者、日本語教師らからの反応が多く、いずれも今回の『新辞典』の大改革に「驚いた」という声が多かったようだ。もちろんアクセント記号の変更には戸惑いと学習の難しさを指摘する人がほとんどのように思える。ただ、この変更後の新記号については「慣れ」が一番であることは、これまでの改訂でも証明されている。旧辞典に慣れてしまったベテランの利用者ほど頭の切り替えが大変かもしれない。しかし、アクセント記号のこれまでの「棒カギ式」に比べれば、今回の斜線「\」の方が分かりやすいという声も多いので、この記号の定着をはかることが急務であると感じる。また、収録語数を約7万5000語と大幅に増やしたこと、動詞・形容詞の活用形を本編に掲載したことについては概ね好評価であるし、地名アクセントについても「地元アクセントをそのまま採用すべきだ」という意見はあるものの、その「地元アクセント」自体が調査をする度に年齢や地域、職業、性別、自治体の首長、観光協会などの属性の違いで大きく変化する現状もあって、どれを「地元アクセント」として採用すればよいのか判断に迷う。この調査段階での実情を承知している筆者からすれば、次善の策として「地元放送局のアクセント」を付記したことは賢明な方法ではなかったかと評価する。読者諸氏にはぜひ一度『NHK日本語発音アクセント新辞典』を手にとりて使って見て、ご自身で評価をしていただきたいと願う。

7. まとめ

今回の『NHK日本語発音アクセント新辞典』の発行については、筆者は自ら発起人となり途中まで調査研究および編集に関わってきた一人として実に感慨深いものがある。かつて内部にいた側からすると、大改訂への大胆な編集方針の変更と、まさに「舟を編む」ような膨大な調査研究編集作業をよく成し遂げたと高く評価したいところだが、一旦発行されてしまえば、辞典とい

うものは一人歩きをし、客観的な評価を加えられる対象となる。ゆえに筆者は、当事者の意識とそこを離れた研究者・利用者の立場という二つの微妙な状況にはさまれている。そこで最後は、当事者意識を離れて一人の研究者としていくつか指摘しておきたい。

まず、今回の改訂によってアクセントの変更をした語は、全体から見れば約5%であり、そのほとんどは旧版を引き継いだ形になっているということである。また『新辞典』でも、東京語を基盤とした「共通語」という観点からアクセントを決定するという伝統的な立場を堅持しており、昭和18年から続く「NHKアクセント辞典」の歴史的伝統を放棄した大改訂ではないのである。今まで曖昧だった基準をより明確にし、記号や表示方法を含めた大胆な改訂を断行することによって今後の「NHKアクセント辞典」の方向性を示唆したという点で、大きな意味のある改訂であると評価したい。しかし、「新たなアクセント記号」の導入や個別の大改訂の内容を利用者にあまねくお知らせするには、これからも発行者としての説明責任を十分に果たし、戸惑いと混乱を最小限にとどめて、利用者の『新辞典』への定着に向けて努力を重ねていく必要がある。NHKにはその点を充分理解してほしいと考える。

また、近年は国際交流基金などの日本語教育機関、大学などの研究機関、海外の日本語学校、NPOなどいくつもの組織が、インターネットを使って日本語の発音アクセントを検索・指導できるサイトを開設しており、この『新辞典』で示した発音アクセントを、付録のCDやDVD、あるいはネット検索、電子辞書（NHKは旧辞典版で音声版を載せている）などで、日本人のみならず、外国人や留学生、在日外国人、訪日観光客ら向けに、音声での学習・修得法のサービスなどを提供できるように、開発をさらに進めてほしいと切に願う。

【引用・参考文献】

- 『日本語アクセント辞典』（1943／昭和18年版）NHK放送文化研究所編
『日本語アクセント辞典』（1951／昭和26年版）NHK放送文化研究所編
『日本語発音アクセント辞典』（1966／昭和41年版）NHK放送文化研究所編
『日本語アクセント辞典改訂新版』（1985／昭和60年版）NHK放送文化研究所編
『新明解日本語アクセント辞典』（2014年／平成26版）三省堂発行 金田一春彦監修、秋永一枝編著
『日本国語大辞典（第2版）』小学館（北原保雄監修日本語大辞典第二版編集委員会編）
『角川新国語辞典』（角川書店）山田俊雄、吉川泰雄編（1981年）
「アクセント記述の方法」（明治書院）上野善道（2002）佐藤武義・飛田良文（編）『現代日本語講座3発音』p163-186
「国語アクセントの史的研究」（春陽堂書店）金田一春彦著（1943）日本方言学会編『国語アクセントの話』p105-210
「NHKアナウンサーのアクセント19年の変化」菅野謙、白田弘、最上勝也、宗像朋子『NHK放送文化研究所研究年報27（1982年）
『NHK日本語発音アクセント辞典新版』（1998（平成10）年版）NHK放送文化研究所編
「アクセントの示し方について」塩田雄大（2016b）『NHK日本語発音アクセント新辞典（付録／解説編Ⅱ）』NHK放送文化研究所編
「この辞典で扱う発音とアクセントについて」塩田雄大（2016a）『NHK日本語発音アクセント新辞典（付録／解説編Ⅰ）』NHK放送文化研究所編
「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂具体的な作業方針をめぐる検討～アクセント辞典改訂専門委員会（第7回）から～」塩田雄大、山下洋子、東美奈子（2014）『放送研究と調査』NHK放送文化研究所発行

2014年9月号

- 「『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂 項目表示形式の検討～アクセント辞典改訂専門委員会（第6回）から～」塩田雄大（2012）『放送研究と調査』NHK 放送文化研究所発行2012年9月号
- 「『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂調査結果にもとづく作業方針の検討～アクセント辞典改訂専門委員会（第5回）から～」（塩田雄大（2011）『放送研究と調査』NHK 放送文化研究所発行2011号3月号
- 「全国アナウンサー音声調査の結果報告～アクセント辞典改訂専門委員会（第4回）から～」塩田雄大（2010）『放送研究と調査』NHK 放送文化研究所発行2010年5月号
- 「『アクセント辞典』改訂際2回調査に向けて～第3回『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂専門委員会～」（坂本充2009b）『放送研究と調査』NHK 放送文化研究所発行2009年5月号
- 「『アクセント辞典』改訂への要望～現行アクセント辞典・アナウンサー全項目調査から～」（坂本充2009a）『放送研究と調査』NHK 放送文化研究所発行2009年2月号
- 「『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂基本方針決まる（坂本充2008b）『放送研究と調査』NHK 放送文化研究所発行2008年11月号
- 「『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂始まる」（坂本充2008a）『放送研究と調査』NHK 放送文化研究所発行2008年8月号
- 「『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂①伝統を受け継ぎ、新しい変化にも対応～『NHK アクセント辞典』13年ぶりに大改訂～」加治木美奈子（1998b）『放送研究と調査』1998年6月号
- 「標準アクセント選定のための試み—アナウンサーのアクセント調査—」植地南郎、西谷博信、宮脇瑞枝（1962）『放送文化研究所年報7』1962年
- 「音訳情報室～NHK 日本語発音アクセント新辞典が出版されました(2016/06/08)」佐藤孝順 <http://onyaku.blog.fc2.com/blog-entry-19.html>